

天王寺方楽譜にみる記譜の一考察

出口 実紀

本稿は天王寺方の箏築譜および笛譜を対象に、近世の天王寺方における記譜の特徴について考察するものである。比較考察の対象とする楽譜は、唱歌と本譜が記される箏築譜と笛譜とし、天王寺方の中で箏築を主業としていた東儀家、笛を主業としていた岡家の譜を扱い、各譜に見られる記譜の傾向とその系統分類を試みた。その結果、天王寺方の譜には唱歌の「リ」の表記が片仮名表記の他に、「利」「里」という表記が確認できた。中でも、「利」を用いる譜の系統は大阪に居住する「在天」の家筋の譜にだけ見られる特徴であり、近世の天王寺方の譜は唱歌や本譜（旋律）の違いによって、東儀家、岡家ともに二つの系統が存在することが判明した。

キーワード：天王寺方、記譜、東儀家、岡家

はじめに

これまでの研究の中で、近世の雅楽譜は楽家によっていくつかの特徴的な唱歌や旋律が見られることが明らかとなっている〔遠藤 2011、寺内 2004、2010、2011〕。しかし、各家の譜を精査すると同じ楽家の譜であっても記譜の特徴や旋律が必ずしも同一ではない事が判明した。そこで本稿では、「楽家」という大きなまとまりではなく、さらに細かく家筋や主な居住地および活動地にまで焦点をあて、近世における天王寺方の記譜の系統について提示する。

1 天王寺方楽家について

近世の天王寺方は、藺・林・東儀・岡の四つの楽家で構成され、藺家と林家は代々笙を主業とし、東儀家が箏築、岡家が笛をそれぞれ担っていた。天王寺方楽家は大阪の四天王寺を主な活動場所として、近世に入ると禁裏や江戸へも登用されるようになる。多くの天王寺方は大阪に居住する「在天」であったが、紅葉山楽人となった家や、京都での参仕に従事するため居住地を京都へ移す「在京」の家が生まれるなど、近世の天王寺方は大阪、京都、江戸の三地域に点在していた。

天王寺方楽家の一つである東儀家は、本家と四つの分家、安倍姓東儀家の本家と分家一つ、紅葉山楽人となった家筋三つ（内、一家は安倍姓東儀家）の計11家で構成される。『楽家録』によると、「東儀氏箏築及び右舞をもって業となす。〔此の中左舞人有り、また笛を業となす者有り〕名乗り兼、家紋鳶」〔楽家録 卷5:1514〕⁽¹⁾と記される。これによると、東儀家は箏築、右舞を主業とするが笛および左舞を主業とする家も存在し、平出久雄の系図には分家筋の兼頼（1632～1712）の家筋が岡家より笛を習い、笛と左舞を主業となったと記述される。名乗り字は「兼」や「文」、安倍姓東儀家では「季」を用いる〔資料1〕。

岡家は、本家と三つの分家、紅葉山楽人となった家筋一つの計5家で、『楽家録』には、「岡氏龍笛および左舞

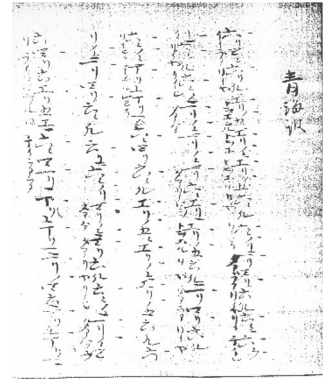
をもって業となす。名乗り昌、家紋薺葉〔但し六葉もって風車の如し〕〔樂家録 卷5:1515〕⁽²⁾とあることから、岡家は龍笛と左舞を担う家であること、「昌」という字を名乗りに使用することが分かる。さらには岡家も「在天」と「在京」の家筋があり、在天の家筋三つ、在京の家筋一つで構成される〔資料2〕。

2-1 東儀家の筆築譜

本稿で記譜の考察対象とする東儀家の譜は、次の5冊である。

【譜①】『筆築畧譜』（東京藝術大学附属図書館蔵）

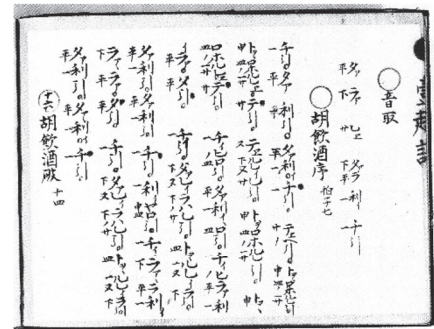
元禄二（1689）年、東儀兼友（1624～1713）撰の譜。兼友は、東儀分家筋である兼元（生没年未詳）の息子。壹越調16曲、平調18曲、雙調9曲、黄鐘調9曲、盤渉調10曲、太食調14曲、高麗曲16曲の合計92曲を所収。



【譜1】『筆築畧譜』

【譜②】『天王寺筆築楽譜』（名古屋大学附属図書館蔵）

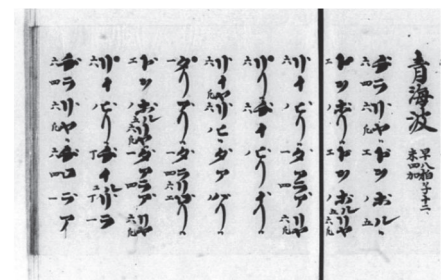
題簽欠。奥書「右天王寺流齊楽譜一百四／十曲／享和三年孟正 遜亭潜子信甫／授受謄寫」とあるように、享和三（1803）年の書写譜。壹越調22曲、平調26曲、雙調14曲、黄鐘調18曲、盤渉調14曲、太食調17曲、高麗曲26曲の合計137曲を所収。



【譜2】『天王寺筆築楽譜』

【譜③】『筆築假名案譜』（東北大学狩野文庫蔵）

表紙墨書「筆築假名案譜」、年代未詳。奥書には元鳳の名に加えて「當家相承之秘訣也」と記す。元鳳（1793～1861）は東儀家分家筋の元信（1756～1797）の息子。『地下家傳』には、「在江戸楽人」として記載される。壹越調12曲、平調15曲、雙調12曲、黄鐘調8曲、盤渉調8曲、太食調10曲の合計65曲を所収。

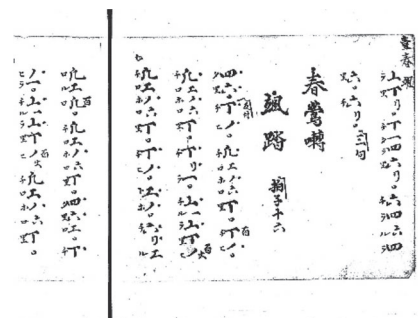


【譜3】『筆築假名案譜』

【譜④】『筆築假名譜並高麗楽等』（東北大学狩野文庫蔵）

元治元年（1864）、東儀文均（1811～1873）による写本。

奥書「元治元年甲子三月／近江守太秦文均寫」。文均は、南都方楽家の芝葛起（1770～1817）三男。東儀家本家の文暉（1777～1843）の養子になるが、その後、東儀家分家の文信（1801～1817）の養子となる⁽³⁾。壹越調16曲（内、沙陀調3曲と表記）、平調18曲、雙調12曲、黄鐘調12曲（内、水調3曲と表記）、盤渉調11曲、太食調11曲（内、乞食調3曲、性調1曲と表記）、高麗曲15曲の合計95曲を所収。

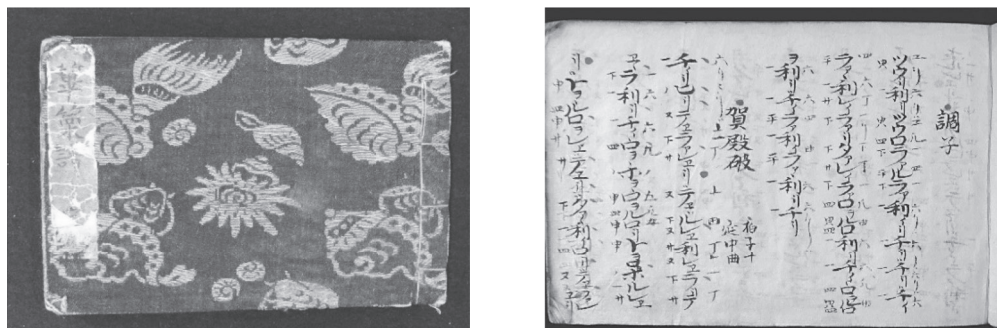


【譜4】『筆築假名譜並高麗楽等』

【譜⑤】『筆築譜 完』（小泉文夫記念資料室蔵）

奥書「天王寺東儀播磨守／傳之所畧譜／通計総八十二葉不數表紙／中盛彬（印）。書写年代は未詳。小泉文夫記念資料室の目録によると、日根野盛員による写本で、東儀播磨守所伝の譜、天王寺岡氏の譜を書

写した譜とされる。『地下家伝』によると、東儀家で播磨守に任ぜられた家筋は兼次（1600～1664）を祖とする家であることから、この家筋の譜を書写した可能性が高い⁽⁴⁾。壹越調 17 曲、平調 19 曲、雙調 12 曲、黄鐘調 13 曲、盤渉調 11 曲、太食調 11 曲、高麗曲 15 曲の合計 98 曲を所収。



〔譜 5〕『筆築譜 完』

2-2 筆築譜にみる記譜の傾向

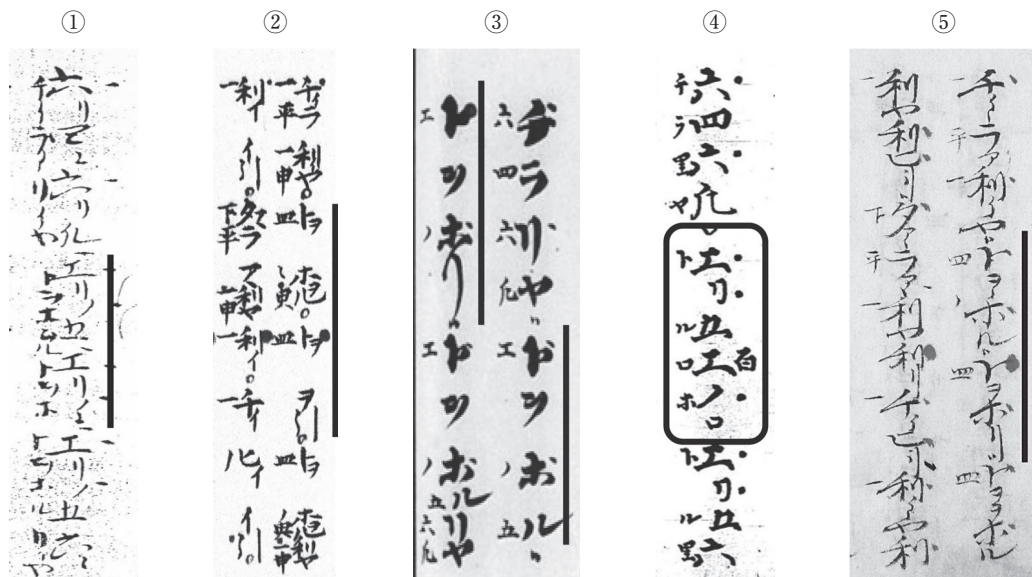
考察対象である 5 冊の筆築譜を見ていくと、まず記譜の方法が 2 種類に分けられる。譜例 1 は、盤渉調《青海波》の冒頭箇所を年代順に譜①から⑤まで並べたもので⁽⁵⁾、譜①と④は中央に大きく本譜（指孔）が書かれ左に唱歌が付されているが、譜②④⑤は「明治撰定譜」をはじめ現行譜のように中央に唱歌を記し、その左が本譜となっている。

また、この 5 冊の中には唱歌の「リ」という表記が三つ存在することが分かる。現行のように片仮名の「リ」を用いるのは譜①と③である。一方、譜②と⑤では漢字の「利」を用い、譜④は漢字の「里」とそれぞれ表記される。さらに漢字の「利」を用いる譜②⑤では、唱歌左横の本譜が現行のような指孔を表記するのではなく、「一＝壹越」「平＝平調」のように音名表記を用いるという共通点があることも判明した。譜⑤は書写年代が不明であるものの、譜①③、譜②⑤がそれぞれ共通するということから、このような唱歌の記譜の違いは年代による差異ではないと考えられる。



〔譜例 1〕筆築譜にみる「リ」の表記（例：盤渉調《青海波》冒頭）

では、譜の基本的な表記の違いの他に、共通点や相違点はあるのだろうか。そこで、5冊の譜すべてに所収されている唐楽譜を中心に、各曲の比較をおこなった。譜例2は、同じく盤渉調《青海波》の一の太鼓部分である。

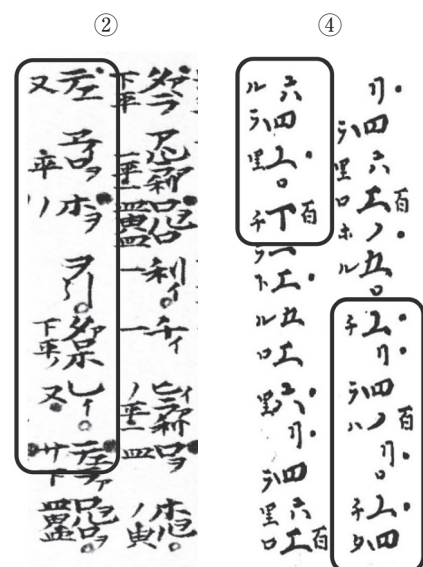


〔譜例2〕 盤渉調《青海波》一の太鼓

一の太鼓の唱歌をみると、譜①では「トラホラル／トラホ」とあり、譜③⑤も同じ唱歌であることが確認できる。譜②では「トラホラル／トラヲ引」と最後のフレーズで指孔を打音する「タタキ」と呼ばれる部分の唱歌が見当たらない点や母音表記の有無は異なるが、その他の唱歌は譜①③⑤と一致する。一方、譜④では「トルロホ」と明らかに異なった唱歌が記され、一の太鼓の「工（盤渉）」の唱歌の時、譜④では「口」を用いている。さらに本譜で確認すると、他の譜では二つのフレーズに分かれているが、譜④は一つのフレーズとして表記されている。この譜③④は比較的年代が近いので、唱歌の違いは年代によるものとは考えにくい。つまり同じ近世の東儀家の譜であっても、基本的な楽譜の表記や唱歌は同一ではなかったと推察できる。では同様に、他の曲にもこのような違いはみられるのであろうか。

譜例3は雙調《賀殿急》の四の太鼓から六の太鼓の本譜と唱歌である。譜②の四角で囲んだ部分（太鼓四の次の小拍子）の唱歌は「テエエイロヲホヲ引／タアロホレイ／テ～」であり、譜④では「チラハ／チタルラリ／チ～」とある。このように、譜④では「上（雙調）」の音の時「チ」という唱歌を使用する傾向が強く、他の曲でも同じ使用が確認できた。また、この箇所に関しては、唱歌だけでなく本譜（旋律）にも違いがみられる。太鼓五と六の間の旋律が譜②では「下平ノ双」と表記され「fis-e-g（タタキの音は除く）」という音の動きであるのに対し、譜④は「上四六上」と「fis（もしくはg）-e-d-g」という音の並びで、平調（e）と雙調（g）の間に壹越（d）が含まれている。このように旋律の差異は軽微なものであるが、同じ東儀家の譜に違いが存在するという点は見逃ごせない。

本稿で対象とした箏築譜5冊は、①⑤が在天、③は紅葉山、④が在京の家筋の譜である。②は「利」や音名表記、各曲の唱歌や本譜から②と同じ系統の譜であると推測できるため、①②⑤が在天となる。つまり、



〔譜例3〕 雙調《賀殿急》
（太鼓四から六まで）

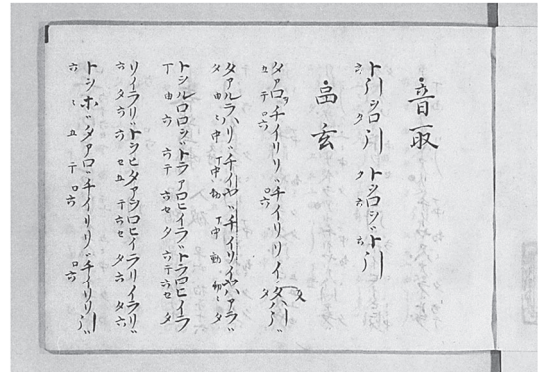
「リ」「利」「里」にみられる表記の相違は、家筋や居住地または主な活動拠点がどこであるかが影響するのではないだろうか。

3-1 岡家の笛譜

では次に、笛譜の記譜の傾向を考察するとともに、東儀家の譜で浮かび上がった家筋と記譜の関係について探る。本稿で比較考察の対象とする岡家の譜は、次の5冊である。

【譜⑥】『龍笛假名譜』（国立歴史民俗博物館蔵）

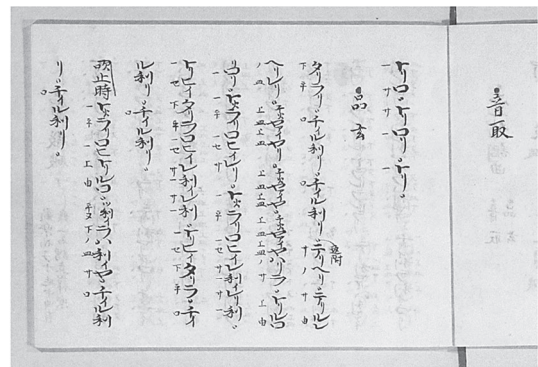
文化八年（1811年）、岡昌芳（1734～1817）による譜。昌春（1696～1760）の長男として生まれ、昌春に継いで家督を相続する。所収曲数は、壹越調 23 曲、平調 21 曲、雙調 15 曲、黄鐘調 12 曲、盤渉調 11 曲、太食調 11 曲、高麗曲 17 曲の合計 110 曲。



【譜 6】『龍笛假名譜』

【譜⑦】『龍笛假名譜』（国立歴史民俗博物館蔵）

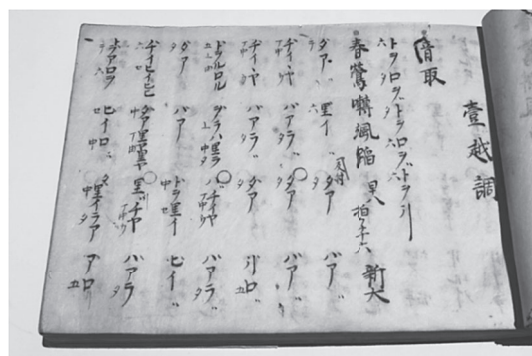
天保三年（1832年）、岡昌但（1773～1848）による譜。昌但は、『新撰楽道類聚』を編纂した岡昌名（1681～1759）の三男、昌朝（1739～1775）の息子にあたる。三男の息子であれば、本来は家を相続する立場ではないが、家督を継いでいた昌業（1779～1822）の息子が若くして亡くなったことから、昌業の養子となって文政十年（1827）に家を相続した。所収曲数は、壹越調 25 曲、平調 24 曲、雙調 15 曲、黄鐘調 16 曲、盤渉調 13 曲、太食調 18 曲の合計 111 曲。



【譜 7】『龍笛假名譜』

【譜⑧】『横笛譜』（個人蔵）

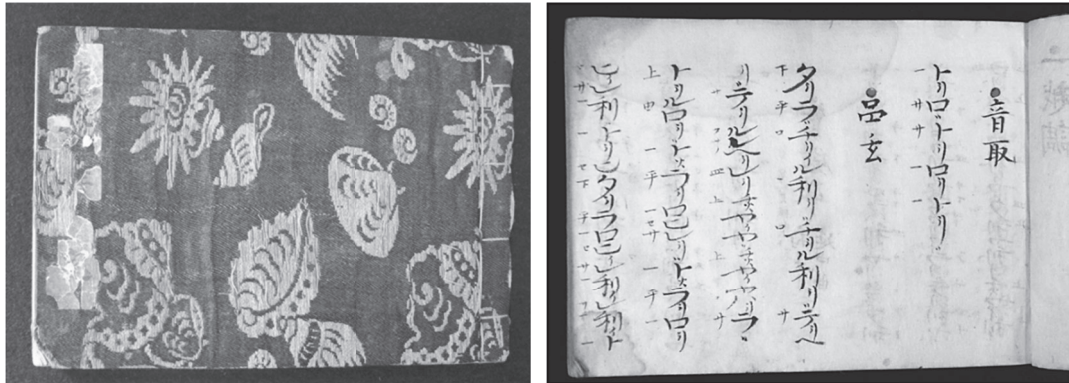
題簽欠。天保三（1833）年、書写。奥書に「右横笛譜壹帖者／岡家正傳以假名／譜書寫畢」「天保三壬辰季（印）」とあり、天保三年という近世の書写譜であること、岡家の譜を書写したものであることから今回比較考察の対象譜に含めた。壹越調 18 曲、平調 20 曲、雙調 15 曲、黄鐘調 12 曲、盤渉調 11 曲、太食調 12 曲の 88 曲を所収。



【譜 8】『横笛譜』

【譜⑨】『龍笛譜 完』（小泉文夫記念資料室蔵）

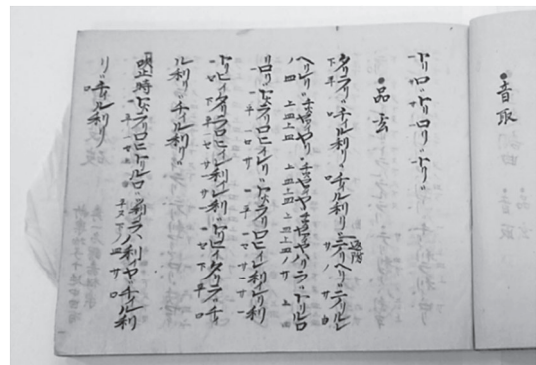
題簽欠。天保6年（1836年）、書写。奥書に「干時天保六乙未七月／天王寺岡氏譜／日根野木工助盛員写之（花押）」とあり、日根野盛員が天保六年に岡家の譜を書写したものである⁶⁾。壹越調22曲、平調21曲、雙調12曲、黄鐘調11曲、盤渉調12曲、太食調13曲の合計91曲を所収。



〔譜9〕『龍笛譜 完』

【譜⑩】『龍笛假名譜 全』（京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター蔵）

嘉永四年（1851年）、岡昌好（1820～1869）による譜。昌好は、譜⑦の昌但の息子にあたる。壹越調25曲、平調24曲、雙調15曲、黄鐘調16曲、盤渉調13曲、太食調18曲と譜⑦と同じく唐楽111曲が所収されるが、この譜ではさらに高麗曲24曲が追加で所収されている。



〔譜10〕『龍笛假名譜 全』

3-2 笛譜にみる記譜の傾向

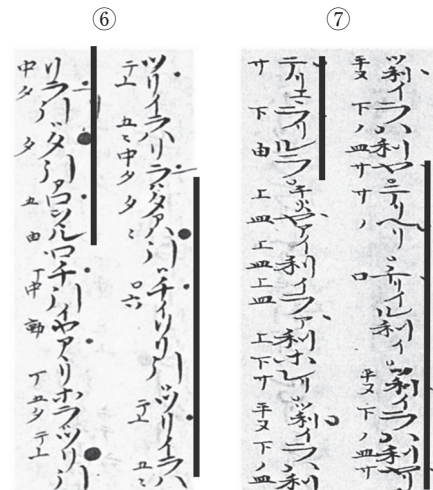
5冊の笛譜を精査すると、箏築譜と同様に唱歌の「リ」という表記が三種存在することが判明した。譜例4は、盤渉調《青海波》の冒頭部を並べたものである。四角で囲んだ箇所を見ると、片仮名の「リ」と表記するのは譜⑥、「利」と表記するのは譜⑦⑨⑩、「里」と表記するのは譜⑧であった。つまり、これらの表記は東儀家独自のものではなく、東儀家、岡家に共通してみられることから、天王寺方の記譜の特徴と考えられる。また笛譜でも、「利」が譜⑦⑨⑩にみられる事、譜⑧では「利」を用いていない事から、表記の違いが年代による差異では無いと言える。さらに漢字の「利」を用いる譜⑦⑨⑩では、箏築譜の譜②⑤と同じく音名表記を用いるという点が共通する。



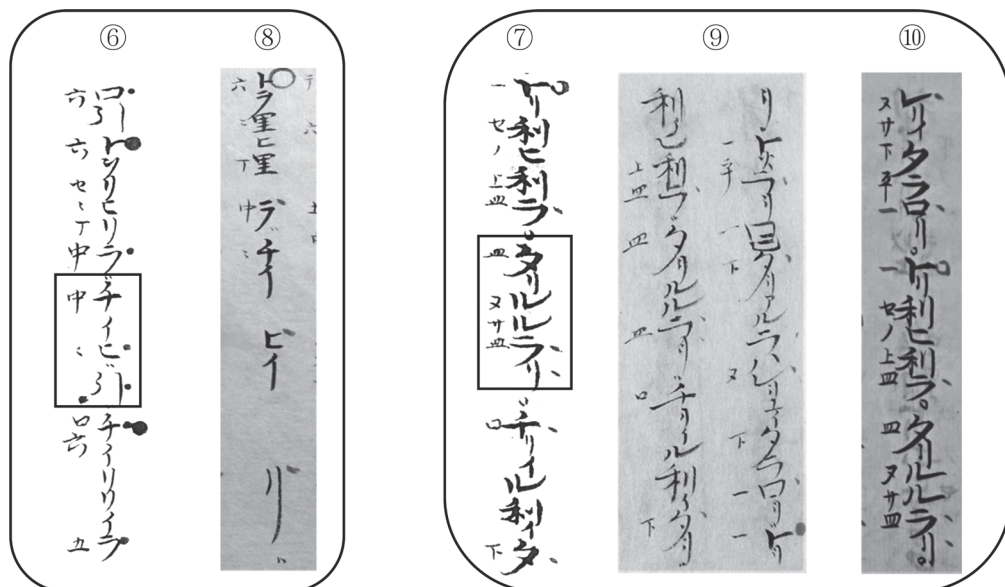
〔譜例4〕 笛譜にみる「リ」の表記（例：盤渉調《青海波》冒頭）

この他にも、盤渉調《青海波》では唱歌の違いがいくつかみられた。譜⑥の傍線箇所「トヲリイルイ／トヲリイヒイ」の唱歌が、譜⑦では「トヲヘルウイ／トハハ」となっている。それぞれ左の本譜、音名譜を見ると、旋律としての違いはなく唱歌のみの違いではあるものの、譜⑥⑧、譜⑦⑨⑩で唱歌の一致が確認できる。このような唱歌の違いは壹越調《賀殿急》の冒頭〔譜例5〕でもみられ、また譜⑦⑨⑩は「テヘ」「レヘ」といったフレーズの終わりに「タタキ」を多用する一方、譜⑥⑧は「タリ」のように前の音をそのまま延ばす傾向が唐楽曲全体的に多くみられた。さらに笛譜では、同曲の中で本譜（旋律）にも二通りの系統が存在する。

譜例6は、盤渉調《千秋楽》の太鼓六の部分である。譜⑥では「チイヒイ」と盤渉の「中」の音とタタキの譜字がみられる。一方、譜⑦では「タルラ」と「中」の音から「上タ中」(g-a-h)と音が上がっていく音型になっている。これらの旋律を各種笛譜で比較すると、譜⑥⑧が「チイヒイ」となり、譜⑦⑨⑩が「タルラ」という旋律をもつことが分かる。つまり5冊の譜は、本譜の傾向から大きく二系統に分類が可能であり、この二系統は、譜例4、5による唱歌の分類とも一致し、近世の岡家の譜は唱歌および本譜の系統が二種類存在したと考えられる。



〔譜例5〕 壹越調《賀殿急》冒頭



〔譜例 6〕 盤渉調《千秋楽》六の太鼓

おわりに

東儀家の箏築譜と岡家の笛譜を対象に、記譜の傾向と唱歌や本譜の特徴について考察をおこなった。その結果、両家の譜に見られる特徴として「利」「里」といった漢字の使用が確認できた。同じく近世の京都方、奈良方の譜にはこのような漢字表記がみられないことから、この記譜の特徴は天王寺方独特のものであると指摘できる。また、「利」を用いる譜の家筋を家系図で照らし合わせると、東儀家、岡家いずれも在天の家筋であった。つまり「利」という表記は、天王寺方の中でも在天の家筋がもつ傾向といえる。一方、「里」を使用する東儀家の譜④は「在京」の家筋であるが、在京岡家の譜⑥が「里」を用いていない点や岡家の譜⑧にも「里」がみられることから、天王寺方の表記の一つではあるものの、現時点では「在京」の記譜とまでは断定できず、今後さらに他の在京天王寺方の譜を対象に検討が必要である。

このように唱歌や本譜を含む記譜は、東儀家や岡家といった楽家という大きなまとまりだけでなく、さらに細かな家筋や居住地との関係性に着目する必要がある。在京の家筋では、三方楽所として日々の参仕が京都方楽人や南都方楽人と共に奏楽することを考えると、京都方や奈良方と近い記譜の楽譜が必要となるのではないだろうか。その結果、天王寺方ではありながらも在天の家筋とは異なる唱歌や記譜の系統へと変化していく可能性は大いに頷ける。その一方で、今回の考察は近世後期の譜が中心であったことから、在天の家筋では天王寺方の特徴的な記譜を近世後期まで伝承していたことが明らかとなった。

注

- 1 卷四十五「楽人姓氏并家紋」に、「東儀氏以_レ箏築及右舞_ヲ為_ス業。〔此中有_レ左舞人_ノ、亦有_レ笛為_ス業者_ノ〕名乗兼、家紋葛。」
- 2 卷四十五「楽人姓氏并家紋」に、「岡氏以_レ龍笛及左舞_ヲ為_ス業。名乗昌、家紋薺葉〔但以_レ六葉_ノ如_ク風車_ノ〕。
- 3 平出久雄の系図によると、養子に入った文暉に嫡男である文静（1824～1871）が生まれた為、分家の文信養子となる〔平出 1989〕。
- 4 播磨守に任ぜられたのは、兼次、兼直、兼年、兼里、俊昞、俊鷹である。
- 5 譜⑤は書写年代が不明であるため、年代が特定できるものから順番に提示した。
- 6 譜⑤と同じ装丁、同じ手による書写。

〈参考文献〉

遠藤徹

2000 「竜笛旋律のなかの「由」の痕跡」『東京学芸大学紀要』51：185-196。

遠藤徹・清水淑子・前島美保

2011 「紀州徳川家伝来の雅楽譜について」『国立歴史民俗博物館研究報告』166：7-80。

芝祐泰

1967 『雅楽通解』（楽史篇）東京、国立音楽大学。

寺内直子

2004 「江戸時代初期における龍笛唱歌に関する一考察」『神戸大学国際文化学部紀要』22/23：1-27。

2010 「東儀兼頼撰『龍笛吹艶之事』と江戸時代初期の龍笛の系統」『神戸大学国際文化学研究科紀要』34：1-43。

2011 「江戸時代の「楽家」と音楽伝承のアイデンティティ：龍笛と箏築の唱歌を中心に」『神戸大学国際文化学研究科紀要』37：44-94。

平出久雄

1989 「日本雅楽相承系譜」『日本音楽大事典』東京、平凡社。

南谷美保

1993 『四天王寺舞楽之記』大阪、清文堂出版。

2018 「楽人東儀文均の交流関係から見えるもの：弘化・嘉永年間の京都での動向から」『四天王寺大学紀要』2018（1）：47-73。

2019 「楽人東儀文均と文人社会—江戸末期三方楽所楽人と文人社会の関わり方の一例として」武内恵美子（編）『近世日本と楽の諸相』183-199、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。

山田淳平

2018 「紅葉山楽人考」『藝能史研究』220：1-24。

〈資料〉

『楽家録』5 安倍季尚 1690／1936／1977 〔復刻 日本古典全集〕東京、現代思潮社。

『禁裏東武並寺社舞楽之記』京都大学附属図書館蔵。

『地下家伝』1844／1978 〔復刻 日本古典全集〕東京、現代思潮社。

『天王寺箏築楽譜』名古屋大学附属図書館蔵。

『箏築假名案譜』東北大学狩野文庫蔵。

『箏築假名譜並高麗楽等』東北大学狩野文庫蔵。

『箏築譜 完』東京藝術大学小泉文夫記念資料室蔵。

『箏築畧譜』東京藝術大学附属図書館蔵。

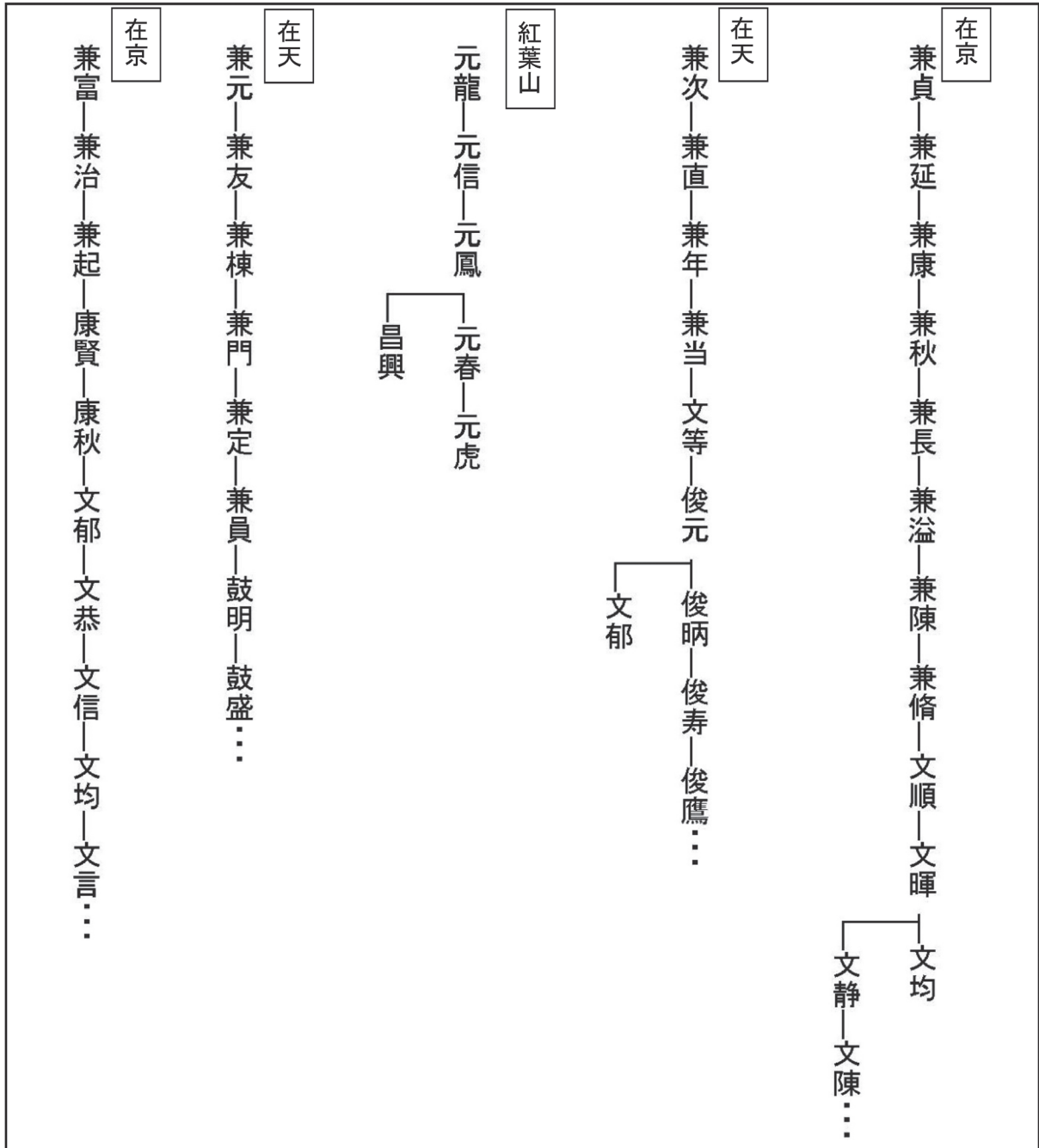
『横笛譜』個人蔵。

『龍笛假名譜』国立歴史民俗博物館蔵。

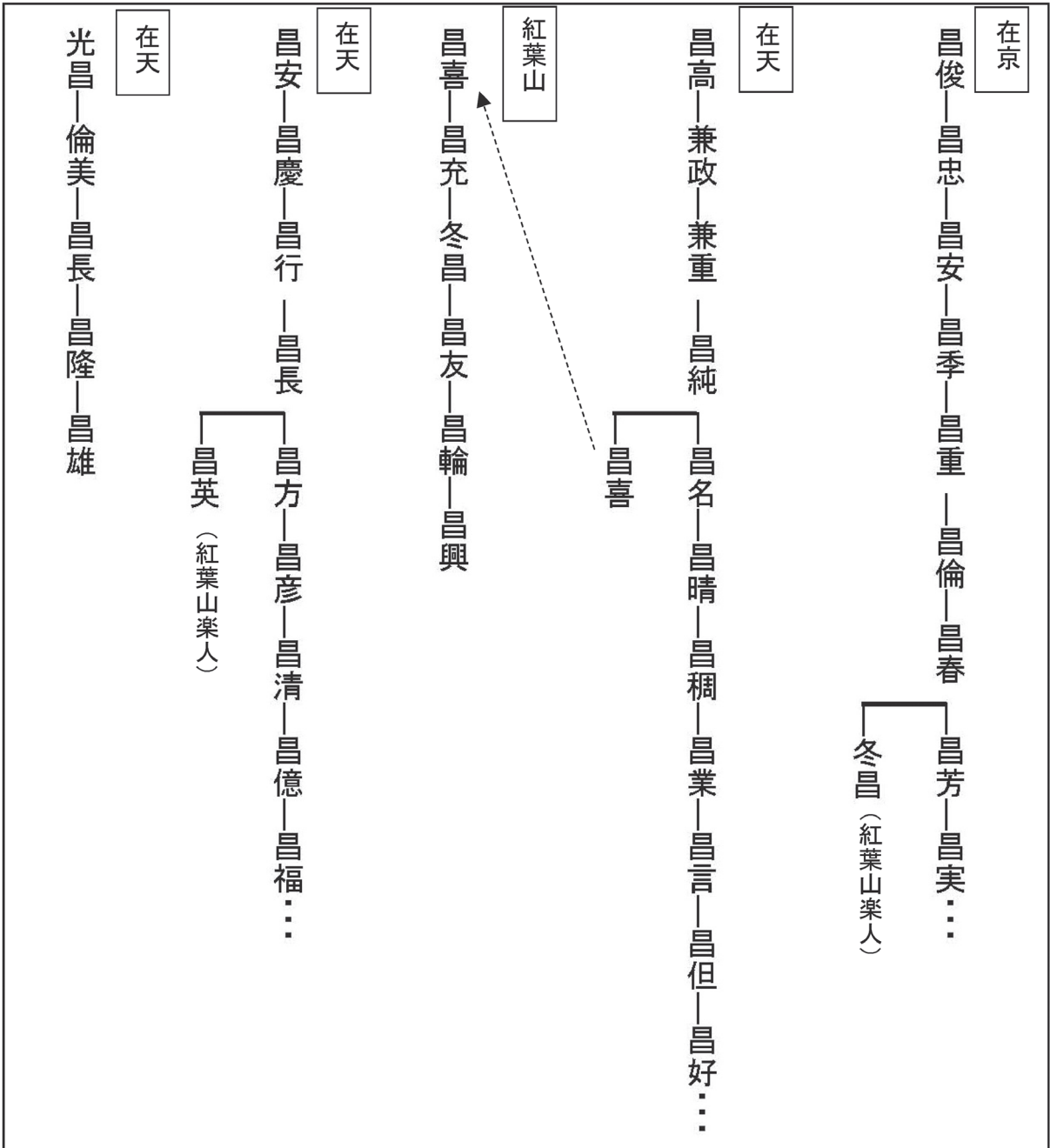
『龍笛假名譜』国立歴史民俗博物館蔵。

『龍笛假名譜 全』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター蔵。

『龍笛譜 完』小泉文夫記念資料室蔵。



〔資料 1〕 東儀家系図 (抜粋)



[資料 2] 岡家系図 (抜粋)

